ARTICLE

コロナ禍における高齢者インプロ実践の可能性

―千葉県柏市「くるる即興劇団」の取り組みから―

三重大学大学院教育学研究科准教授　園部友里恵

1　はじめに

インプロとは、脚本や事前の打ち合わせがないなかで、共演者や観客とともに物語を紡いでいく即興演劇を指す。本稿で事例とするのは、千葉県柏市豊四季台団地を拠点に活動する高齢者インプロ集団「くるる即興劇団」である。くるる即興劇団のはじまりは、2014年～2015年に開講された生涯学習セミナー「豊四季台くるるセミナー」（主催：東京大学高齢社会総合研究機構、共催：柏市・柏市社会福祉協議会）における講座「即興劇で学ぶコミュニケーション」であった。同講座が平日の午前中という時間帯に設定されたこととも関連し、参加者は「高齢者」と呼ばれる年代の者たちとなった。特に、70代後半から80代（当時）で、豊四季台団地に独居で暮らす者が中心であった。また、そのなかには、耳の聴こえづらい者、数分間の起立が困難な者、複雑な説明の理解が難しい者など、様々な身体的・認知的特性を有する者がみられた。また、参加者のほぼ全員が過去に演劇を本格的に学んだことがなかった。

インプロには、事前に暗記しておくべきセリフもなければ、演出通りの「正しい」動作の再現も必要ない。また、インプロは、ゲーム形式で学ぶことができるため、演劇未経験者であっても、ゲームを楽しみながら自然に演劇の世界に入っていくことができる。筆者は、こうしたインプロという演劇形態が、様々な身体的・認知的特性を有する高齢者を包摂し得るものとなるのではないかという仮説のもと、同講座の参加者有志（約25名）とともに、2015年7月、くるる即興劇団を結成した。そして、そこに自らファシリテーターとして関わりながら、同劇団をフィールドとしたアクションリサーチを継続している。

くるる即興劇団は、結成後、豊四季台団地内の公共施設の会議室を使用し、毎月約2回（1回あたり1時間30分程度）の稽古と、毎年2回（1回の上演時間は1時間20分程度）の公演をしてきた。しかし、2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、稽古場として使用していた公共施設が使用禁止となり、対面での活動を中止せざるを得ない状況となった。本稿では、対面での活動が難しくなってしまったときにどのような取り組みを進めていったのかを紹介し、コロナ禍における高齢者インプロ実践の可能性と課題について検討していく。

園部　友里恵
（そのべ ゆりえ）
三重大学大学院教育学研究科准教授。東京学芸大学ほか非常勤講師。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。著書に『インプロがひらく〈老い〉の創造性：「くるる即興劇団」の実践』（単著、新曜社、2021）、『人生100年時代の多世代共生：「学び」によるコミュニティの設計と実装』（共著、東京大学出版会、2020）など。

2　コロナ禍での取り組み①：「ハガキで即興！」

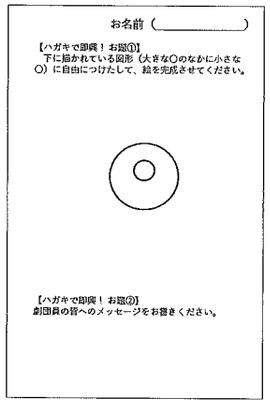
2・1　取り組みの経緯と内容

稽古場が使用できなくなった約1か月後（2020年4月）、全国に緊急事態宣言が発令され、インプロの活動どころか、近くに暮らす家族とも気軽に会うことが難しい状況が続いていた。そうしたとき、筆者は劇団員のことが気がかりになった。なぜなら、多くの劇団員は独居であり、家の外に出て様々な活動をおこなうことを楽しみに過ごしていたためである。これまで続けてきた活動が制限されてしまっているなかで、劇団員たちが穏やかに過ごせているのかとても心配になった。

世の中では、テレワークやオンライン授業など、人々が直接会わずに関わりあう方法が瞬く間に広がっていった。インプロ実践界でも、オンラインでのワークショップや公演など、新たな取り組みが多く生まれていった。しかし、それらはすべて、デジタル端末やインターネット環境を持っている者だからこそできることであった。対して、劇団員のほとんどは、パソコンやスマートフォンなどを持っていない。また、持っていたとしてもそれをインターネットに接続することに不安を抱いている者も少なくなかった。

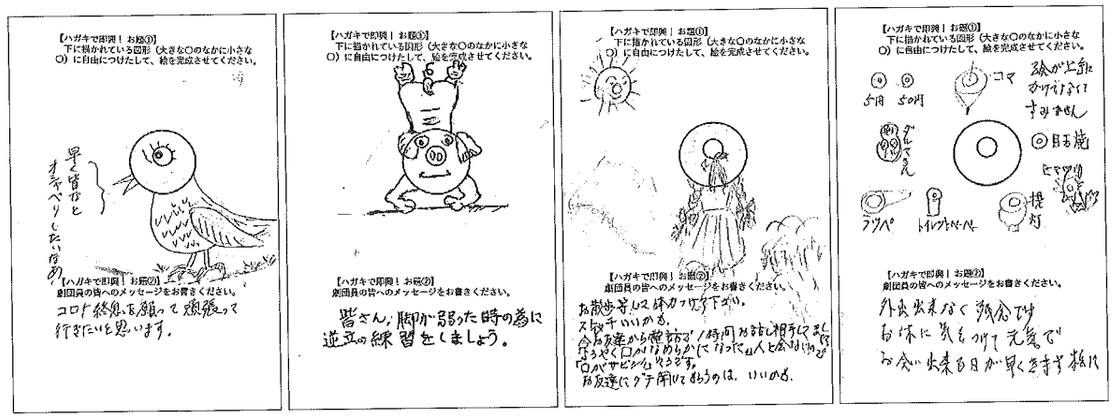
そうしたなかで、デジタル端末やインターネット環境の所有の有無や、それらを使いこなす能力の高低を問わずに、劇団員が気軽に参加できるインプロ的な取り組みができないかと検討した。そこで実験的に開始したのが、「ハガキで即興！」であった。

2020年5月1日、筆者は、劇団員1人1人に1通の往復はがきを送った。往信面で【お題】を示し、その【お題】への回答を返信面に書いて投函してもらうというものである。そして、劇団員から集まった回答を「通信」にまとめて共有していく。初回の【お題】の1つ目は、はがき内に印刷されている図形（大きな円のなかに小さな円が1つ入ったもの）に自由につけ足して絵を完成させるというもの、2つ目は、劇団員へのメッセージを書くものであった。参加は任意とし、往信面にはこの企画が「自粛生活のなかのささやかな「いい時間」になれば」と記した。



「ハガキで即興！」
初回（2020年5月）の【お題】

劇団員からの返信の反応は想像以上であった。反応が薄ければ1回限りでと考えていたが、劇団員の回答をとりまとめた「通信」とともに、次回の【お題】も送付することにした。こうして、2020年度については1か月に1回、2021年度からは2か月に1回の頻度で、「ハガキで即興！」を継続していった。はじめは、筆者や、筆者の担当授業（東京学芸大学「演劇教育実践演習」）の受講者が【お題】を考えてきたが、次第に、【お題】づくり自体も【お題】として設定するようになった。また、回答の枠外に近況報告や他の劇団



「ハガキで即興！」初回（2020年５月）の【お題】に対する劇団員たちの回答

員へのメッセージを記す劇団員も多くみられたため、「みなさんへのメッセージや近況報告など」という欄を常設した。

2・2 「コロナ」を扱うか、避けるか

脚本のないインプロでは、セリフ自体も演者自身がその場で紡いでいくことになる。そのため、演者の発するセリフ、そしてそれらが連なることによって生み出される物語は、季節や社会情勢、そしてそのときの演者自身の心情や体調などを反映させたものとなる場合も少なくない。例えば、これまでも、春季に公演を行うと「花見」や「入学式」など春に関する話題が物語のなかに含まれたり、選挙前に公演を行うと政治家の役が登場したりするということがあった。

新型コロナウイルスは、劇団員たちの生活を大きく変えた。「ハガキで即興！」においても、特に開始してしばらくは、劇団員たちの返信のなかに「コロナ」にまつわるアイデアが多分に含まれていた。例えば、２０２０年８月、「ことばあつめ」と題して「○○会」ということばをたくさん集め、その翌月には集まったことばからいくつか選び物語をつくることに取り組んだときのこと。「使えることば」としては、ファシリテーター（筆者）が劇団員から集まったことばのなかから「同窓会」「飲み会」「発表会」「老人会」「新年会」「送別会」をピックアップした。その結果、劇団員から届いたのは、例えば次のような物語であった。１つ目と２つ目では「コロナ」の触れ方に大きく違いが見られる。

・**同窓会**に行ったら今や老人会であった。最初は若い頃の話で盛り上がったが、そのうち愚痴話ばかり。さしつさされつの**飲み会**となり、酔いつぶれた。

・久しぶりに**老人会**に行き友達と会えると喜んで行ったら、コロナが恐いからと来なく淋しい集まりだった。飲み物も無く弁当も無く体も動かさず。ビンゴだと言ってマスクをして話すことも出来ず。コロナが憎い。早く消えてと思いながら。会長さんが**新年会**には元気で大勢の人が集まることを祈っています。

継続していくなかで【お題】自体も劇団員から募集するようになったとき、その【お題】自体のなかにも「コロナ」が登場し始めた。例えば、ある劇団員は、今後取り組みたい【お題】のアイデアとして「コ・ロ・ナ を使って、この各々の字の後に言葉を続けて文章をつくる」というものを提案し、実際に２０２０年12月にはこの【お題】に取り組むこととなった。

ファシリテーターとして、「コロナ」をあえて扱わないという選択もとれなくはなかったが、劇団員たちの生活に大きく影響を与えたことからも、コロナを避けるのも不自然と考え、しばらくはそのまま続けていた。しかし、その後、「コロナのことから離れたい」といった意見も劇団員から出されるようになった。そうした意見を受け、【お題】を少しでも「コロナ」から離れられるようなものに設定していったが、やはり「コロナ」に関わる回答を出してくる劇団員は毎回数名みられた。

2・3 劇団員同士をつなぐために

対面でのインプロは、同じ時間と空間を共有し、「いま、ここ」で生まれる物語を紡いでいき、それが瞬時にその場にいる全員に共有される。対して、「ハガキで即興！」は、自分の好きな時間に好きな場所で思いついたアイデアを個人が記し、その後ファシリテーター（筆者）のもとに送られ、そしてそれらをファシリテーターが集約することで、全体に共有される。すなわち、「ハガキで即興！」は、主には、個人活動的な要素が大きく、またそこで生み出されるやりとりの中心は、各劇団員とファシリテーターでなされるものとなる。したがって、対面でのインプロのように、誰かが出したアイデアに別の誰かがその場ですぐにアイデアを重ね物語を構築することが難しいのである。

そこで、取り組みはじめたのは、劇団員間のやりとりを、間接的にでも起こすという【お題】づくりである。例えば、２０２０年12月～翌年２月にかけて、「コロナちゃんのものがたり」という【お題】に取り組んだ。対面稽古でも取り組んだことのある「むかしむかし」のフォーマットを用いて、前月に他の劇団員がつくった文章に自らの文章を重ね、３か月間かけて１つの物語を完成させていくというものである。「むかしむかし」のフォーマットは、「①むかしむかし」「②毎日毎日」「③ところがある日」「④そして」「⑤そして」「⑥そしてついには」「⑦その日以来」「⑧教訓」の８つから構成されている。それぞれの出だしのことばの後に一文を足すことによって、物語をつないでいく。

「ハガキで即興！」では、主人公の名前を「コロナちゃん」（人間、動物、モノなど。「ウイルス」とは限らない）とし、劇団員たちは、①～③までを２０２０年12月に回答する。その後、そのすべての回答が掲載された「物語リスト」が翌月届く。そして、他の劇団員がつくった①～③までの物語から何かを選び、それに続けるかたちで④～⑥をつくっていく。さらに翌月には、また別の誰かが、つくられた①～⑥の物語につなげるかたちで⑦⑧を加える。そうして３か月かけて１つの物語が完成していくのである。

3 コロナ禍での取り組み②：「Zoom稽古」

3・1 取り組みの経緯と内容

「ハガキで即興！」を継続し、しばらく経った２０２１年３月、ある劇団

員からメールが届いた。そのメールには、Zoomを用いて「出来る人だけで近況報告はまずいでしょうかね」と書かれていた。筆者はそれまで、機器の所有の有無や使用能力の高低によって、劇団員の参加に差が出てしまうことを避けたいと考えていた。しかし、劇団員から提案されたことをきっかけに、劇団員とZoomを一度つないでみようと決めた。

「Zoom稽古」（初回は「くるる即興劇団Zoomでおはなし」と呼んでいた）を初めておこなったのは、2021年5月26日であった。13時からの開始を予定していたが、事前に参加表明していた劇団員（5名）全員が揃ったのは、開始から約20分後であった。Zoomへの接続や、接続後にカメラやマイクをオンにするのに戸惑ったりなど、時間がかかってしまったのである。初回は、劇団員同士の近況報告や「雑談」をする時間を多くとりながらも、過去の対面稽古で実施したことのあるインプロのゲームやアクティビティをオンライン上でおこなったりした。

初回には、頭文字が指定されて近況報告するというアクティビティをおこなった。ファシリテーターが事前にひらがなが一文字書かれたカードを用意しておき、そのカードの束から1枚ランダムに引き、出てきた文字を頭文字にして短く近況報告をおこなっていく。例えば、「が」が引かれたときには「我慢の連続、もう限界」、「つ」のときには「つまらない毎日ですが、リハビリに通ってます」、「さ」のときには「さっさと行ってよ、コロナちゃん」、「し」のときには「しっかり寝てます」、「ぼ」のときには「帽子がないと、頭が日焼けて、夜になるとかゆくなる」といった発言が劇団員からなされた。

「Zoom稽古」初回（2021年5月）の様子

はじめは、時間がかかっていた接続も、その後回を重ねるごとに、デジタル機器の使用が得意なメンバーのサポートもあり、次第にZoom上で様々な活動ができるようになっていった。

そして現在、「Zoom稽古」は、1か月に1回、約1時間程度おこなわれている。「ハガキで即興！」同様、筆者の担当授業を受講する大学生たちがゲストとして参加する場合もある。劇団員のなかには、この「Zoom稽古」をきっかけにスマートフォンへ機種変更した者もいるなど、対面での活動が制限されているなかで、「Zoom稽古」はインプロ実践を継続する貴重な機会となっている。

3・2 「Zoomならでは」の表現

「ハガキで即興！」では、1人1人がどのような表情で【お題】に答えているのか、その過程が見えてこない。「Zoom稽古」を初めておこなったとき印象的であったのは、劇団員同士が互いの顔を見て非常に嬉しそうにしたことである。「顔が見られる」安心感は、やはり、たとえ現実には同じ場所にいないにしても、「いま、ここ」を共有しているという感覚を得ることに結びついている。

「Zoom稽古」には、こうした「顔が見られる」嬉しさがある一方、「顔しか映らない」ことは、インプロをおこなう上での制約となる場合もある。例えば、全身を使った表現をすることが難しい、等といったことである。しかし、劇団員にとっては、ことばもからだも用いる、という通常のインプロの複雑さが、少しだけ解きほぐされる感覚が得られているようにみえる。

また、対面稽古のときには、しばしば、耳のきこえに不安を抱く劇団員からは「声を大きくして」という注意のことばが飛び交うこともあった。しかし、「Zoom稽古」では、劇団員が、自ら自由に好みの音量に調整することができる。また、そのことは、声を大きく出すことが難しい劇団員にとっても有効に作用していると言える。対面稽古の際にありがちな、舞台上から客席の後ろまで声が届かないといった心配がないためである。

劇団員の生活の一端を垣間見ることができるのも、「Zoom稽古」ならではである。2021年8月の「Zoom稽古」では、指定された色のものを映してそれが何かを紹介するというアクティビティをおこなった。例えば、ある劇団員が指定した「緑」に対して、参加した劇団員から紹介されたものは「サボテン」「本」「我が家でとれたきゅうり」「お茶っ葉の入った缶」「すいかの皮」であった。こうした多種多様なものを、対面稽古の場に持ち込むことは難しい。こうしたアクティビティは、同じ場所にいないからこその表現を生み出していると言える。

3・3 ファシリテーションの難しさ

インプロでは、できるかぎり不安や負担を取り除いた状態で舞台に立てるようにすることが重視される。くるる即興劇団においても、対面稽古の際には、もし舞台に立った演者が困っているようなそぶりを見せたら、ファシリテーターが物語に様々なかたちで介入するようにしていた。そのとき判断材料になるのは、演者の表情やからだの状態など、非言語的なものの場合が多い。

しかし、「Zoom稽古」の場合、そうした演者が出す非言語的なメッセージを受け取ることが難しくなってしまう。実際、「Zoom稽古」のなかでも、名前を呼ばれたり自分の順番が来たりしたときにその劇団員の反応がなく、ファシリテーターや他の劇団員が戸惑う場面が何度もあった。反応がないのは、その本人が何かに困っているのか、それとも単純にインターネットの接続不良なのか。対面稽古のときには、ファシリテーターは、1人1人の劇団員が舞台に上がるときにはその劇団員の目を見て、順番を確認するようにしていた。しかし、Zoom上では当然「目を合わせる」ことはできないし、その劇団員だけに声を届けたり、その劇団員のからだに触れて促したりすることができなくなってしまうのである。

ただ、回を重ねるごとに、ファシリテーターは、Zoom接続中にうまれる「沈黙」の時間を楽しめるようになっていった。次に示すのは、2021年8月の「稽古Zoom」でおこなった即興劇の一場面である。このときには、はじめに当日参加した劇団員と職業名をリストアップし、そこからランダムで選び、選ばれた職業からインスパイアされた場面を即興でつくっていくことに取り組んだ。Aさんが演じることになったのは「警察官」であった。ファシリテーターは、「取り調べ」の場面を、Bさんとともに演じるよう提案した。

警察官（Aさん）：あらまたあんたか。

困るんだよね、ここはね、そんな何回も来られたんじゃいけないところなんですよ、1回だけにしておきなさい。これでもう3回目でしょ。今度は何をやったんですか。（…3秒沈黙…）○○（＝Bさんの本名）さん、今度は何をやったんですか。（…8秒沈黙…）

容疑者（Bさん）：ちょっと、（…3秒沈黙…）、ちょっと、いただいただけなのよ。

Bさんの「Zoom稽古」への参加はこの日が初めてであった。また、この場面を演じる前におこなっていたアクティビティの際にも、Bさんに順番がまわってきたときに「あら、私？」と返答する場面もあったことから、ファシリテーターは、当初、警察官役のAさんが「今度は何をやったんですか」というセリフを発した後に、すぐに容疑者役のBさんからのセリフが返ってこなかったことに若干戸惑った。おそらく、その後Aさんがセリフのなかに「○○さん」とBさんの本名を入れながら演じ続けたことからも、Aさんも自分の発したセリフがBさんに届いているのか心配になったのではないかと推察される。しかし、その後、Bさんは、さらに長い沈黙の後、「ちょっと」とゆっくり話し始めた。

Bさんが意図的に沈黙の時間を長くしたのか、自分の番だと気づかずに間が空いてしまったのか、インターネットの接続不良のような外的なハプニングなのかはわからない。ただ、「沈黙」の時間は、結果的に、「取り調べ」の場面のリアルさを生み出し、「ちょっと、いただいただけなのよ」というBさんのセリフは、それまでの緊張感を打ち破るように、共演者のAさんや他の劇団員の爆笑を誘ったのである。

4　おわりに

以上、コロナ禍における高齢者インプロ実践として、くるる即興劇団による「ハガキで即興！」「Zoom稽古」の取り組みを詳述してきた。

「ハガキで即興！」は、厳密に言えば、必ずしも「即興」とはいえない。インプロでは、アイデアを表出する前に個人で思考すること（「検閲」と呼ばれる）を避けるように様々なしかけがなされる。しかし、「かく」という活動によって表現する「ハガキで即興！」では、個人で思考することにファシリテーターが介入することはできないのである。また、「かく」ということは、その表現が瞬時に消えずに残っていくことを意味する。そうしたことから自ら【お題】の回答へのハードルを上げてしまい、参加できていない劇団員もいる。しかし一方で、1つの【お題】に対して何度も何度も思考し、そのなかで自身として納得のいくアイデアをハガキに記すことを「たのしみ」と捉えている劇団員もいる。他者とかかわりながら負担なく表現し、少しでも「即興」の度合いが増すような【お題】を今後も検討していきたい。

「Zoom稽古」についても、継続するなかで参加できる劇団員の人数も増えている。しかし、参加できるのは、劇団員のうちの約5分の1にすぎない。一実践者として、機器の接続や使用方法に困っている劇団員から電話がかかってくると、今すぐそばに行けるならという心苦しい気持ちになる。また、参加したくてもできない劇団員たちは、この「Zoom稽古」のことをどう感じているのかということも気がかりである。

しかし現状、劇団員同士のつながりをとぎれさせないためには、できることを続けていくしかない。

いずれの取り組みにも、参加したくてもできない劇団員がいることに触れてきた。そうした点からも、やはり対面での活動が再開できる日が1日でも早く来ることを待ち望んでいる。しかし、インプロは、まさに、いわゆる「3密」の活動である。講義形式で講師の話をただ聞くということではなく、参加者自らが自身のからだを動かし、他者と関わりながら物語を紡いでいく。当然、相手と会話する場面もあるし、役によっては相手のからだに触れる場面もある。たとえ対面での活動が再開されたとしても、「感染したらハイリスク」と報道される高齢者と呼ばれる年代の劇団員にとって、それまでと同じ「距離感」（物理的にも心理的にも）で安心して他者とかかわりながらインプロができるのかは未知数である。そうした不安を完全払拭することはできないが、それであってもまた劇団員たちと「いま、ここ」を共有してインプロができるようになる日がくることを待ち望んでいる。

社会的セーフティネットの構築
—アメリカ・フランス・イギリス・日本—

編著／岩崎久美子（放送大学教授）　2019年2月21日発行
A5判　208頁　定価1650円（本体1500円＋税）　送料／310円　ISBN-7937-0138-2 C3037

第1章　アメリカ
総論：アメリカにおける子どもの貧困と教育
事例1：フェイシーズSF
事例2：カリフォルニアNPO協会
事例3：フリーモント・ファミリー・リソース・センター
事例4：スパークポイント
事例5：ティーチ・フォー・アメリカ
事例6：イーストベイ アジア青少年センター
事例7：スマート・プログラム
事例8：ピア・ツー・ピア大学
事例9：NuVu

第2章　フランス
総論：子どもの貧困と教育をめぐるフランスの状況
事例1：フォーラム・デ・アソシアシオン
事例2：余暇・社会統合協会
事例3：地域文化・経済・社会協会
事例4：サンプロン
事例5：レゾリス
事例6：パスポート・アブニール（未来へのパスポート）
事例7：ATDカールモンド
事例8：オートゥイーユ職業訓練院

第3章　イギリス
総論：就学前保育と教育
事例1：ランベス早期行動パートナーシップ
事例2：カーディナル・ヒューム・センター
事例3：子ども協会
事例4：ロンドン市長基金
事例5：ファミリー・アクション

第4章　日本
総論：子どもの貧困に関する政策の動向と課題
事例1：日本財団・子どもサポートプロジェクト
事例2：彩の国子ども・若者ネットワーク
事例3：True Colors
事例4：チャイルド・リソース・センター
事例5：エデュケーションエーキューブ
事例6：子どもデザイン教室
事例7：おおさかこども多文化センター
事例8：豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
事例9：暮らしづくりネットワーク北芝
事例10：グリーンコープ生活協同組合
ふくおか・子ども支援オフィス

上記の書籍のご注文は全国各地の書店または（一財）日本青年館 編集部 まで
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4-1　TEL 03（6452）9021　FAX 03（6452）9026